

「踊る」考 “yu”

気づけば、音楽を聴きながら踊るという習慣を身に着けてから実に11年近く経過している。高2の終わりの2月19日、天保山にあったBayside Jennyへ。電気グルーヴの石野卓球のDJで朝まで踊ってた。踊り方もわからぬまま。それから、残りの高校卒業までは、田中フミヤのCHAOSというイベントに通いつめた。独りで。一回り上のお兄さん、お姉さんが、真っ暗なフロアでストロボフラッシュとスモークたきまくりの空間で、キャーキャー騒いでたなあ。それをチラチラ見ながら、やはりごちない踊り方で黙々と踊ってた。「次の曲どんな曲だろう。」とか「このねーさん、派手やなあ。えらい背中開いた服着て。こんな服どこに売っとんねん。まあええか。ムフフ。」なんてことを考えながら。

その後、大学でいろんな音楽が好きになるとたくさん出会った。ようやく独りじゃなくなった。自ら人前でレコードをかけるチャンスももらった。好きな音楽にどっぷり浸かれる時間があつた。今でも財産だと思っている。

5年前か、6年前か。中国系アメリカ人のDaniel Wangという日本語のうまい男が、今はなき四ツ橋のFLATというクラブにDJしに来た時のことだ。プレイをはじめた彼は、序盤の2、3曲をかけた後、スヘツと縦フェーダーを落とす、こう言い放った。

「ミナサン boothヲ ミナイデ クダサイ。DJハカミサマジャンナイ。ツギ マエムイタラ オト トメマスヨ。」

僕は、楠田行展とKengo Matsuiと戸惑いながら後ろ向いて踊っていたのを覚えている。MadonnaのHolidayを聴きながら。普段の自分がどう体を動かしているのか考えた。クラブのフロアで踊るという身に染み付いた行為について。

ブースを向きながら漫然と体を揺らす。フロアという、顔も知らない人も含めた多くの人間が集う空間。たった1つの音をたくさんの人が楽しみにきている。この空間で全く無意識のステップ。勿体ない。

大学出てから、ますますバカ騒ぎできる友人が増えたのは非常に幸いなことだ。同時にいいDJをする友人にも。いつもフロアに分かち合える人がいる。そうしたバカ騒ぎの中で、もっと自由に踊りたい、もっと楽しく踊りたい、踊るを通して意思疎通できたらいいのという思いが強まっていった。

ごきげんな酔っ払いとして、笑いかも含めやりたい放題踊る今の自分は、高校時代の自分の姿からは全く考えられない。流れる音に神経を集中し、個人的に没頭するために踊る人はフロアを見渡してたくさんいるが、僕はその楽しみ方も正しいと思う。個人的であり、社交的な空間であるところが自然なフロアだと思うから。

クラブやバーなどのフロアで音楽を楽しむパーティーへ足を運ぶことが習慣づいた人の中に、なにか楽しみ方に行き詰まりを感じている人はどれぐらいいるかわからないが、僕の場合、後ろを向きながら踊ったあの夜をきっかけにして、目の前が広がった。

双方向でありたい。フロアで踊るもん同士でも、ブースとフロアの関係でも。自分がブースにいても絡みたいですが、ハイ。そんなことを考えながら、今日もまた。僕は、性懲りもなく踊ってます。

極私的ハウス嘸「お酒の巻」“itaru waku”

いやあ〜、歳を重ねるにつれどどん1年がはやくなりますネエ……。寒さもいよいよこれからが本番です。みなさん体調管理にはお気をつけを。さて毎度おなじみのこの駄文、極私的にハウス・ミュージックにかんする話題を、という本旨から離れ、雑感をつらつらと――。

男たるもの、美味しいお酒と上手い付き合いかたをしたいものだと常々考えております。まあどちらかというと好きなクチで、日ごろからわりと呑むんですが、だいたいビール→焼酎というのが定番です。たまにワインやラム、ウイスキーなんぞも嗜むのですが、日本酒はなぜかチト苦手。いや、呑めないわけではなく、むしろ口に近づけたときの香り、ひと口含んだときの味わい、そしてノドを滑る感触、どれをとっても美味いんですが、それ故について「クイツ」とやっつけてしまいそうになるんですかねえ。で、冬の寒い日なんかには「今日はやっば熱燗かな」、てなことを考えてしまいます。

近所に「日本三大居酒屋」(太田和彦)に数えられる名店があり、ちよくちよく暖簾をくぐるのですが、この店冬場は樽酒を置いてるんです。先日も散髪のとあとふらりとひとりこの店に立ち寄ったワタクシは、まずビールをいただき、普段なら次は焼酎を、と頼むところですが、寒い日でしたのでグラスに残るビールと相談もって(夏場以外生ビールは置いてない店なのです)、「いや、今日は酒だな。しかも熱いのだ」と考えなおし、「熱燗を」と注文したのであります。と、見事な手さばきから抜群のお燗で差し出される徳利。

まずひとくち。「うまい」と芯から感じつつ、「ちびちびやろう」と決意しながら、でもその美味さについて「クイツ」と――。気付けばまたしても酔っ払い。

そろそろ出るか。「お勘定してください」。暖簾をくぐると秋深い夜風が火照った顔をふわりと撫でます。「今夜も美味しい酒だったなあ」と刈ったばかりの頭に手をやりつつマフラーをキュとしめなおし、ふらり歩き出す。いやはや、この日もうまい酒を堪能しました。

美味しいお酒を、美味しい肴とともにゆっくりと楽しむ。そんな呑みかたを身に

information

今年も残すところわずかとなりました。ポチポチではありましたが、つつがなく続けていくことができました。これもみなさんとのつながりがあったからこそ。さむーい季節、人とのつながりが一番あつたかく感じられるものです。年末・年始、親しき人たちとよき時間を過ごされることを！

次回コレクティブは来春を予定しています。詳細はブログでご確認ください。(前のホームページから変更となりました)

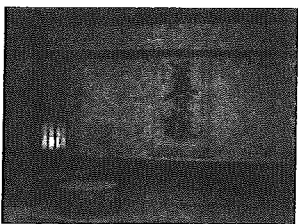
<http://blog-collective.blogspot.com/>

collectiveの新しいMIX CD (select: tawaki / design: yukio kimura) ことができました。都会的なメローグルーヴに酔いしれてください。

新選組旅行記 芹沢 鴨について“楠田行展”

芹沢鴨(せりざわかも)。新選組草創期に組の礎を築いた中心人物であり、筆頭局長だった人物です。彼は水戸の出身で学問、剣の道に通じ、激しい性格でスケールの大きな行動をとったことでも知られています。今回の旅行記は茨城県水戸市・行方市の史跡を中心に、水戸の激しい藩風で育った、芹沢鴨について触れたいと思います。まずは水戸藩の概略から始めましょう。

水戸藩は、徳川家康の11男、頼房が初代となった紀伊、尾張と並ぶ徳川御三家のひとつ。水戸黄門で知られる、2代光圀(みつくに)は、明暦3(1657)年から、天皇家を軸に置いた史観で編集される「大日本史」の編纂事業に藩を挙げて臨みます(明治39(1906)年まで250年かけて完成！すげえ！！)。この頃から藩の気風「尊皇(そのう)」が固まります。時代は流れ、嘉永6(1853)年6月ペリーが浦賀に来航した際、9代藩主斉昭(なりあき)は幕府の重役でした。気性の激しい性質で強い尊皇思想を持った人物だった斉昭。異国を攘(はら)う、「攘夷(じょうい)」を幕府に強く訴えます。大老井伊直弼は開国思想。対立する両者。井伊の専制政治は、水戸藩士を中心とした攘夷派への弾圧、いわゆる安政の大獄に発展します。斉昭は謹慎処分になり、また攘夷派水戸藩士も処刑されました。憤激した水戸脱藩浪士は、江戸桜田門外で井伊を暗殺し報復(桜田門外の変)。そして、水戸の「尊皇攘夷思想」はその後絶えまなく受け継がれました。尚、水戸では攘夷派のことを「天狗」と通称し、藩士、武田耕雲斎を首領とする尊攘集団、天狗組を形成していくこととなります。現在も、水戸の藩校だった旧弘道館には非常に力強い下迫力の字で「尊攘」と書かれた軸が掛けられており、藩の気風を感じることができます。



芹沢鴨は、現在の茨城県行方市(旧玉造町)芹沢の郷土の出身とされ、誕生については諸説ありますが、天保元(1829)年としておきます。芹沢地区には今でも生家跡が残り、菩提寺である法眼寺も立っています。そんな激しい藩風、思想、そして時代の中で少年期を過ごし、考え方が養われた彼も、15歳の頃、天狗組に与しました。江戸で学んだ剣の腕は神道無念流の指南免許皆伝。学問にも通じ、和歌ができるなど風流人でもありました。しかし、本当に激しい性格だったんでしょうねえ、芹沢鴨。ある時同志と議論した際に短気を起こし、3人も斬り捨ててしまいます。捕えられた獄中では「雪霜に色よく花の魁(さきがけ) 散りても後に匂う梅が香(か)」という歌を詠んだそうです。学究肌で風雅な男です、芹沢鴨。この歌は「自分は攘夷の先がけとして働いた。その自分が死んでも水戸(梅は水戸を象徴する花)の攘夷思想は後代まで残る」という意。しかしまあ、やっぱり激しい芹沢鴨。この歌は自分の右の小指を噛み千切った血文字で書いたといひます。

文久2(1862)年、獄中の彼に転機が訪れます。出羽庄内郷土、清河八郎が幕府に建議し採用された「上京する徳川14代将軍、家茂の警護する兵を広く募り、その際は獄中にあっても腕の達者であれば赦免される」旨により、釈放。文久3年2月8日、浪士組230余名の中に加わり、上京します。その際、同郷の平間重助、新見錦、平山五郎らを引き連れて参加しており、近藤勇も浪士組にいました。同月23日に京へ到着した同組ですが、京に着くなり、清河が一変、「幕府のために集めた浪士組を朝廷直属にし、攘夷を断行、果ては討幕のための兵にする」と宣言。これに真っ向から反対したのが、芹沢派5名と近藤派8名の13人。彼らは初志を貫徹する意志を見せ京に残留。一方の清河らは江戸に帰還しました。

残った芹沢、近藤ら13人は「京の治安維持」に生き場所を求め、会津藩主松平容保に謁見し、会津藩御預り壬生浪士組として身分を保証されます。同年8月18日、会津藩は長州藩を京から一掃するクーデターを起こし(8月18日の政変)、この際、壬生浪士組にも出動命令が下り、彼らは蛤御門に駆けつけました。しかし、門に差し掛かった際、会津藩の一隊が彼らを不審がり、通行を許可しません。「通せ」「通さん」の押し問答の中、群れの中から飛び出してきた男がいる。男の名は、やはり芹沢鴨。愛用の「尽忠報國之士(じんちゅうほうこくのみし)」と刻まれた鉄の扇で会津兵の槍と向かい合う。槍に全く動じず「お前ら誰に向かってナメた口きいてんの。ブチのめすぞ」と、言ったかどうか知りませんが同義の言葉でまくしたてた、芹沢の豪快さにより、壬生浪士組の評判は政変後大いに広まりました。そして容保から新選組の隊長を授かることになり、芹沢はその筆頭局長の座に就きました。

しかし、彼の性格、行動はやはり激しいものがあつたようです。大坂での相撲取り斬殺事件。愛妾お梅との酒色に溺れる生活、商家大和屋の焼き討ちなど、組の風評悪化に対する恐れを感じた土方歳三は芹沢派の粛清を画策します。それは、政変に対する報奨金が会津より下り、その金で宴会を設け、泥酔した芹沢らを狙い抹殺するというもの。この計画は9月18日深夜実行されます。刺客は土方歳三、山南敬助、沖田総司、原田左之助の4人。剣に長けた芹沢も泥酔状態を狙われては無力。壬生屯所の寝室でお梅と同食していたところを狙われました。享年34。芹沢派の平山五郎も同じく粛清。新見錦は芹沢よりも以前に切腹を命じられて、既にこの世の人ではありませんでした。ただ一人、難を逃れたのは、平間重助。彼は命からがら逃げ出し、郷里、玉造芹沢まで生還できたようで、明治7(1874)年8月21日、51歳の生涯閉じました。

現在、茨城県行方市芹沢480にある澤屋商店では「尽忠報國」という純米酒を発売しています。地元の由緒ある蔵元が製造・販売元で澤屋さんが発売元のコラボ酒。これは芹沢、平間両者へのオマージュです。道を尋ねるために店に入った時、娘さんが「うちの父が町おこしも兼ねて、個人でノボリまで作ったりして、お土産にも使えるものをということで、お酒を蔵元に作ってもらって売っているんです。父がいればいろいろお話してもらえたのに、あいにく不在で・・・」。筆者「ところでお父さんは何故、個人でそこまでやってらっしゃるんですか」。娘さん「郷里から出た鴨さんと重助さんを偲ぶために。実は私の家系は平間重助の子孫だそうで・・・」。なるほど。代表、平間章二とありました。新選組のDNAを汲む人と言葉を交わせたのは大きい収穫でした。店を出る時、肩越しに、清潔感の漂う、優しい声がしました。「奈良までお気をつけて」。心から「また来たいな」と思った芹沢の郷でした。誠

ルームシェアについて“mackiart”

9月の大型連休にニューヨークへ行ってきました。今回で3回目だったので、観光という目的よりもNYライフスタイルを体感すべくガイドブックは読まず、現地人情報と五感を頼りにエンジョイしてきました。もちろん滞在はホテルではなく現地に住んでいる友人宅へ。お金もかからないし、生活に密着しているし一石二鳥。そんな生活密着型旅行で印象に残った海外での生活術を今回は紹介しようと思います。

今回私が興味を持ったのが“ルームシェア”について。日本ではまだまだあまり馴染みがないですが、向こうでの暮らしではかなりの人がルームシェアをしています。私が泊まりに行った友人の家も日本人3人(男1人、女2人)でシェアをしているんですが、3人ともシェアするまで赤の他人だと聞いてびっくり。シェアしてみても合わないと思たらどうするのか?と1番気になった質問をぶつけてみると簡単にこう言われました。「また引っ越しして相手を変えればいいだけ」。日本で引っ越しと聞くと結構大掛かりだしお金もかかるし、頻繁にするものではないですよ。アメリカは違うんです。身ひとつと布団くらいで充分!なので思い立ったら荷物をまとめて家を出れば良いし、お金もかからない。その理由はほとんどの家が家具付き物件だからだそうです。あとはルームシェア用に用意されている物件が沢山あるのでとりあえず生活できる設備が整っていること。ただ家具付きに当たりハズレは多いそうで、中でもベットのハズレに当たると大変! Bed bugs(南京虫)が発生して体中刺されまくって眠れないとか。あまりにも大量発生すると最悪その家を出なくてはいけないくらいだそうです。問題はそれ以外にも沢山!友人曰く理想の物件に出会うまでには時間がかかるそう。そりゃ理想物件を発見するには数こなさなきゃいけないですよ。

実際にその家で6日間疑似ルームシェア体験しましたが、個々に部屋があるためプライバシーが守られているせいか意外と居心地が良いんです。欲を言えばバスとトイレが各部屋にあったら尚良し!日本人同士だから文化の違いも無いし、お互い干渉し合わないというのも暮らしやすい大きい要因だったと思います。文化の違いというのは一緒に暮らしていく上で1番問題になることみたいで、友人も様々な国の人と暮らしてみたいけど、日本人が1番!我慢できてアジア人だと断言していたくらいです。確かに文化によって食事も全然違いますもんね。干渉しないこともルームメイト同士ほどよい距離感でつき合えるので必要なんだと感じました。あとは何といても1人じゃないということ。仕事から帰ってきてお帰りを言ってくれる人がいるのは異国の地で暮らしていて1番ホッと安心できる瞬間だと友人は言っていました。こういうちよつとしたことも大事なんですね。勉強になりました。

過密な都市部で暮らそうと考えている人、海外進出したい人は是非とも参考にして頂き快適ライフをお過ごし下さい。最後の文が不動産屋のちらしにみたいになってしまつてすいません。おつきあいありがとうございます。